

## 地球規模生物多様性概況第 5 版（GBO5）の作成状況及び 政策立案者向けの要約（SPM（案））のポイント

### 1. GBO5 の作成状況

GBO5 は COP15 で検討されるポスト 2020 生物多様性枠組の基礎とされており<sup>1</sup>、2020 年 5 月に公表される予定である。SPM（案）<sup>2</sup>は SBSTTA23 の会議文書として掲載され、ポスト 2020 生物多様性枠組に関する議題においても議論された（図 1）。

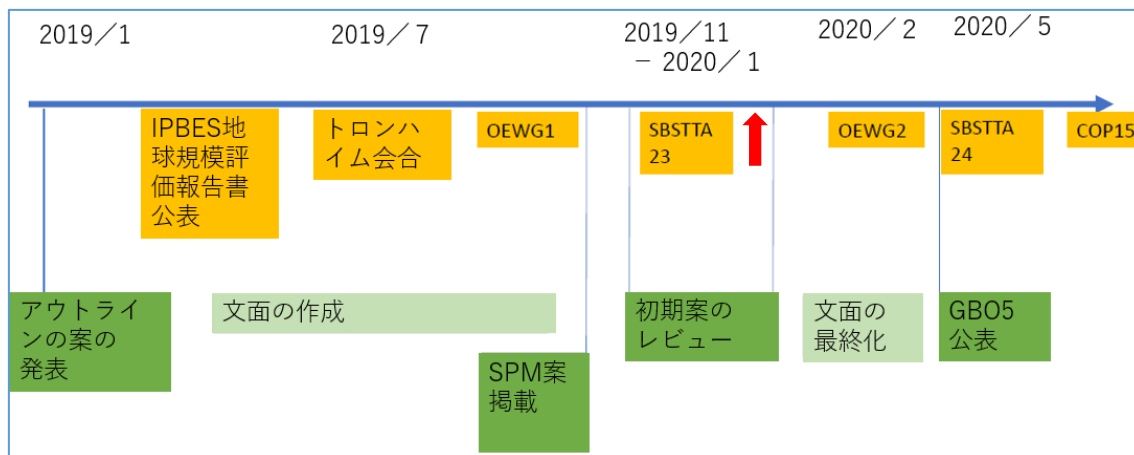


図 1 GBO5 の作成過程と今後の予定。橙色は会合等の主要な関連イベント、緑色は GBO5 の関連作業、赤矢印は現在時点をそれぞれ示す。<sup>3</sup>

GBO5 は、生物多様性の状況については主に IPBES の地球規模評価報告書を、締約各国による実施状況については第 6 回国別報告書の内容を踏まえて作成され、愛知目標の達成状況や 2050 年ビジョン達成に向けての必要な行動等について記載されている（図 2、表 1）。

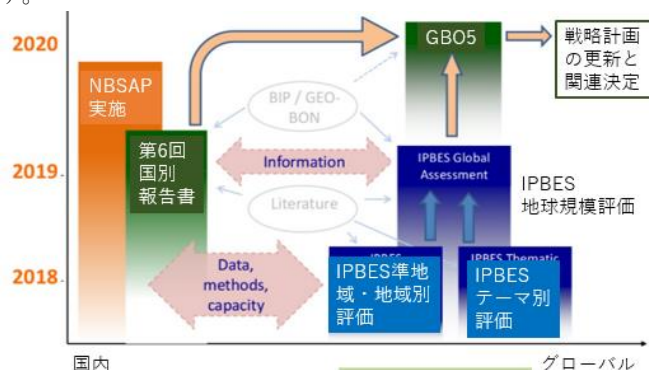


図 2 GBO5 の情報源<sup>4</sup>

表 1 GBO5 の構成

<p>政策立案者向け概要</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 導入</li> <li>2. 2020 年の生物多様性（各愛知目標の達成状況と全体の動向）</li> <li>3. より良い未来への移行</li> <li>4. 結論：緊急事態を直視する</li> </ol>
---

<sup>1</sup> COP13 の決定 XIII/29。原文では、「ポスト 2020 生物多様性枠組」ではなく、「生物多様性戦略計画 2011-2020 のフォローアップ」という表現が使用されている。

<sup>2</sup> SBSTTA23 の会議文書（CBD/SBSTTA/23/2/ADD3）として掲載されている。

<sup>3</sup> 11 月 23 日の GBO5 のワークショップで使用された GBO5 についてのプレゼン資料 (<https://www.cbd.int/doc/c/efcb/d066/0371374c7de5a10e5dcc2463/psot2020-ws-2019-14-presentation-6-en.pdf>) 中の図を編集。

<sup>4</sup> SBSTTA 会議文書（CBD/UNEP/SBSTTA/19/9）の Annex II の図を編集。

## 2. SPM（案）のポイント<sup>5</sup>

### (1) 愛知目標を含む戦略計画 2011-2020 の達成状況

戦略計画 2011-2020 の達成は失敗したが、生物多様性の減少傾向を鈍化・停止させ反転させるには遅きに失したわけではないと評価。

### (2) 2050 年に向けたシナリオと道筋

2050 年ビジョンの実現には、以下の行動の組合せが必要であり、いずれか一つの行動では不十分とされている。

- ・生物多様性を保全・回復するための取組をあらゆるレベルでスケールアップすること。
- ・温暖化を工業化以前の水準から 1.5℃程度に抑制すること。
- ・侵略的外来種、汚染及び、生物多様性の持続不可能な利用についても効果的な措置を講じること。
- ・食料や木材等、生物多様性に影響を及ぼす物品等の生産・消費様式における変革を達成すること。
- ・インフラ建設がその所在地の生態系に与える影響の削減。

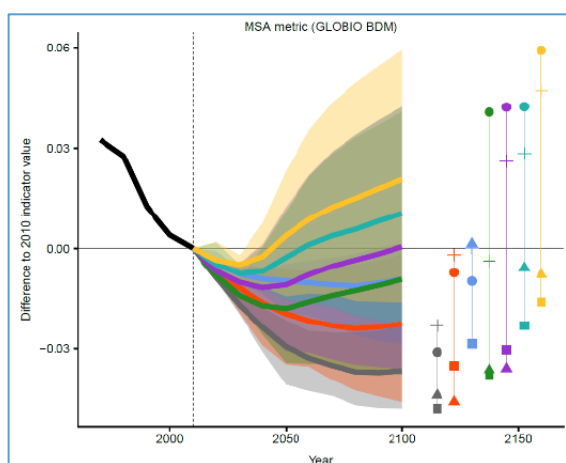


図2 生物多様性の減少傾向の反転につながる行動についての分析結果（縦軸：2010年を基準年とする平均種豊富度、横軸：年）。統合的に取り組むことで（黄色線）、平均種豊富度が回復するシナリオが示されている。<sup>6</sup>

### (3) 鍵となる変化

自然との共存（より持続可能な社会）を達成するために必要な変化群を提示（表2）<sup>7</sup>。このような変化は制度、ガバナンス、価値観及び行動様式における変化によって生じるとされている。

表2 自然との共存を達成するために必要な変化群と変化の内容

<sup>5</sup> SPM 案の III. POSSIBLE PATHWAYS TO REACHING THE 2050 VISION（2050年ビジョン達成に向けた経路）に基づき作成。

<sup>6</sup> IPBES 地球規模報告書の Box5.3 の図を使用。

<sup>7</sup> なお、先日 11 月 23 日に行われた GBO5 関連のワークショップでは、これら分野を抽出した根拠について質問があったものの、発表者から明確な回答はなかった。

変化の分野	変化の概要
土地と森林	食料安全保障の維持と改善が大規模な農地転換を伴わずに行える状況への移行
持続可能な農業	自然資源と生物多様性への悪影響を最小限にとどめつつ、土地と水の利用効率を最大化するような農業システムへの世界的な転換
持続可能な食料	肉の消費を抑え、植物ベースの食品を重視し、サプライチェーンにおける廃棄を劇的に減らすような、健全な食生活への移行
持続可能な漁業	海洋生態系及び陸水生態系が保護・回復され、食料安全保障が保たれ、漁業から生じる利益が長期にわたって保護されるような形での世界の漁業管理の転換
持続可能な都市	人工的な景観の中での自然空間の創出、市民の健康と生活の質の向上、遠く離れた場所等の生態系等へのフットプリントの低減につながる都市の大規模な緑化
持続可能な淡水	自然や人間に必要な河川の流れの確保、水質改善、重要な生息地の保護、侵略性種防除等につながる、淡水系の迅速な回復とよりよい管理のための統合的アプローチ
持続可能な気候行動	温室効果ガスの排出抑制と炭素貯留、生物多様性への利益等を同時にもたらす自然を活用した解決策を支えることで、気候変動の規模の抑制のための行動を加速

#### (4) 自然の多様な価値の反映

2050年ビジョン達成には、人と自然との関係の多様な側面から捉える必要があるとして、「自然と未来の枠組」アプローチ(図3)の下、次の3つの視点から生物多様性にとっての望ましいアウトカムを達成するための政策オプションを評価するシナリオが検討されている。

- ・ 自然のための自然(Nature for Nature) :  
自然の世界を形成する種、生息地及び生態系の多様性に価値を置く。
- ・ 社会のための自然(Nature for Society) :  
自然が人類及び社会に提供する功利的な恩恵を重視する。
- ・ 文化としての自然(Nature as Culture) :  
自我、伝統、信仰及び文化的景観の形成における自然の役割を重視する。

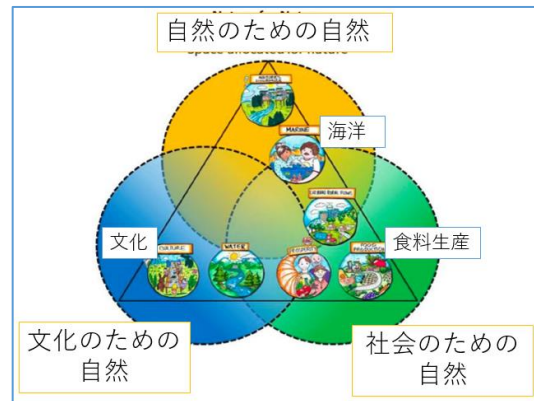


図3 人と自然の関係性の多面性を捉える自然と未来の枠組<sup>8</sup>

SPM案の最後には、これら3つの視点を包含する調和のとれた統合的なアプローチが、望む未来への道しるべとなり、2050年ビジョンの実現を可能にすると述べられている。

<sup>8</sup> GBO5のワークショップでのIPBESの生物多様性のシナリオとモデルに関するプレゼン資料 (<https://www.cbd.int/doc/c/e8fa/2f34/6ec03208de903cdc4776b852/psot2020-ws-2019-14-presentation-5-en.pdf>) 中の図を編集。